

佐渡

審査員長 手塚貴晴

私が佐渡の地に初めて踏み入れたのは50年も前のことになる。当時私はボーイスカウトのような団体に属していた。「ような」というのは、東京大学の学生が同好会のように集まって自然発生した団体であって、歴史や規約をほとんど持たなかったからである。強い子らを育てようという気概と良心に満ちたボランティア団体であったが、残念ながら組織として熟する前に事故が起きて消滅してしまった。若い組織にはありがちなことであるが、理想は無謀という欠点を引き連れている。岩登や遠泳もした。振り返ってみれば、現在の私の芯はこの団体によって鍛え込まれたと思えるが、8才の少年にとっては毎日が生存競争でしかなかった。その団体が佐渡を二週間の行脚の場として選んだ。半世紀を経て既に風化した記憶ではあるが、目まぐるしく変化する景色は覚えている。明るい柔らかな砂浜が岬を越えた途端に消え失せ、急峻な山が覆いかぶさり、僅かな平場に張り付くように漁村が繁茂していた。時には灯明が金色の須弥壇に揺れる古い堂宇の畳を借りたこともあったし、年輪を残して白身がほとんど抜けてしまった板が貼られた船屋で過ごした夜もあった。日本有数の大岩を駆け登ったこともあった。

小佐渡と大佐渡という二つの山が寄り添い、その隙間を平場が埋めている。平場は水田で満たされ、長い歴史を通じて常に、その豊かな石高は住民を養って余りあるほどであったという。その一方で金山は日本政権の中樞を潤すほど豊かでありながら、鉱山には付き物の暗い歴史も抱えている。島であるから当然のことながら漁撈も栄えている。要点は、佐渡とは日本列島の全てを凝集した佃煮のようなもので、文化から商業農業漁業に至るまでが、二本の山脈のもたらす複雑な地形のひだに刻み込まれているということである。よって両津から入り海岸を一周すると、日本列島を一周したかのような芳醇な経験が得られるのである。能が盛んである。佐渡における能は、本土のそれが商業化あるいは政治化した形式とは違い、個々の村落がそれぞれの伝承として大切に守り伝えられ、老若男女を含んだ伝承文化として生き永らえている。能舞台を擁する社寺建築も数多く残っている。江戸時代は北前船の拠点でもあった。日本をあたかも一つの文化圏のように見做す論調もあるが、どこに行っても共通の日本語が通用するようになったのは、強力な中央集権である明治政府が成立した以降のことである。その中であって佐渡は常に中央集権と密接な関係を維持していたから、言葉も通じたという。これは離隔地としてはかなり異例と言って良い。

今回の課題は佐渡という特定の地を選んでいる。しかしながら佐渡は一つの文化圏ではない。よって各自が選ぶ敷地によって様々な回答が出てくるはずである。よって、「佐渡の」という大枠ではなく、「佐渡のどこの」という特定された風土を掴み取る必要がある。多様な作品群を期待する。